



田舎ずまい

福山 嘉直

熊本から田舎に引越してから、もう三年、やっと山村ぐらしになれてきたが、山の村とは大変なところだということが少しずつわかってき、今は、はつきりわかってきたところだ。

交通が不便だというわけではない、玉名郡内の山村、いや、今は町という名に変わっているが、玉名郡内だから、交通が不便だといっても、たいしたことはない。大変な所、という意味は、人の考え方、生活の方法が、どう考えても近代的でない、ということだ。

この村には、戸数が一二〇戸ばかりあるがその内、新聞をとっている家は三〇戸はなからう。月刊雑誌をとっているものは一人もない、婦人雑誌、平凡、明星という雑誌さえ見当たらない、週刊雑誌

は勿論のこと。一二〇戸全員、活字とはえんのない生活をいとなんでいるわけだ。男は一升飲んだ二升飲んだ、が自慢だし婦人は豆をいくらで売った、小豆を市場に出したらいくら売った、その金などの位たまった、がじまんらしい。

そのような村の中に、三年前やってきて、私は店をやりはじめたわけである。あつた商品、煙草、食塩、食品、雑貨だ。

たばこ店のおやじにおさまって、私は今、タイヘンな生活をしているわけである。

村の人たちは、非常にそんたくを気にする、人がしなければ自分だけでもそんたくをする、人がするから自分もしなければそんたくだ、というぐあい。

その一つのあらわれが公役というのではあるまいか。(とは少し云い過ぎで、ケントウちがいが)又、一円、二円の金もそんたくすることは決してしないというりゆうがらしい。チクワ一本もコロケ一個も、多過ぎたから、と返しにくる、それも夕方買って置いて翌日返品にくるしまつである。

煙草一つ売るのにも三度は訊きかえさねばならない。「たばこを下さい」と店に入ってくる。「何上げますか?」と訊き返す。「新生」という、そこで一つ差し出す、すると「二つ下さい」という、そこで又改めて二個差し出すことになる。たばこ屋だと初めからわかっている

のだから、最初から「新生二つ下さい」と、なぜ云わないのだろう。これが一人二人ではない、幾十人となくこの問答を毎日、年中くり返しているわけである。

子供は子供で、五円玉を持ってきて、「このアメを二円、あのせんべいを二円こつちのマーブルを二円下さい」というわけだ。

とはいうものの、この村に、車が三台余りもあるのである、ほとんどがライオンだが、ブルーボードという乗用車が三台もある。四軒に一台という割合だ。農家が、ブルーボードを乗りまわしている、その農家は新聞はとっていない。麦めしに、ジョンジョンで食っている。

これは、どうしたことであろうか? これは政治がわるいのか? 人の教養がないのか? 生活のしかたを知らないのか? 何がまちがっているのか? それとも何もまちがっていないのか? とにかく、九十才以上の老人が十人近くもいる村で、私は今タイヘンな方をしていくわけである。今夜も、村人たちは、めいめい自分のテレビの前で「十人抜き」の自慢でも一心にみつめるにちがいない。

熊本市内の人も、田舎とは、こんなところだ、と知っていたらいいというわけだ。(作家)

菊池野の落葉樹林

佐藤 エミ

針葉樹ばかりみなれてきた阿蘇生まれの私には、菊池野に点在する落葉樹林は今でもひどくやさしい風情にみえる。

芽立ちの頃のうすみどり色に煙る林は通勤の途上で林の脇を通る人々を、多忙の中の神経のないらだちをどれ位なごましてくれただか。毎年のことながら、大地のよみがえりさながらのよるこびをやわらかくかなで魅せられる。

それからむせかえる若葉の季節がやってくる。西合志村の黒石から御代志の辺りを通ると、あの付近一帯にはまさしく「新緑の毒素」が満ち満ちている感じだ。若葉はやがて激しい梅雨の雨に叩かれて逞ましく濃い緑に移り変わる。

梅雨の時間、あの辺りを通ると、茂った樹枝の間に淡紅色の意外に可憐な花が空に向って咲き始めたのに気付く。洗われたような緑の木々の中でこの花は忽ち花火のように伝染する。カルメンのくわえていた花が、真紅のバラなどでなく、原作では実はこのネムの花だったとしたら、あのドラマの女主人公ひいてはあのドラマ全体のイメージにも、少しくデリケートな違いがでてくるのではなからうか等と思ってみたりする。

季節は夏から秋へ。毎日毎日瞬時のよどみもなく木々達は移り変わる。くぬぎ林

の間にまじったハゼの鮮かな赤は、数日の間に林の間をフィルムでも燃やすように素早く燃え広がってゆく。他の葉末は次第に茶がかったきその色は濃くなり、暗れた秋の陽の中で備前焼の肌のように照る。木もれ日はまさしく金色の粉だ。樹木の一本一本が林の全体が、せまる死を前にして自分の為にうたう一大鎮魂ミサにきこえ、ふと肅然とする。ほの暗い未知の木立ちの奥がふと妖しい幻想をかきたてるのもこの季節だ。そろそろ霜のおり始めた草の間に、ある朝、ひっそりと横たわる巨大なスズメ蛾のとじた奇怪な顔の幻影がよぎったりする。

冬のつめたい雨の音を林の中できいた事はない。厚いコートの袴をたてて、泥んこ道をブーツで歩いてみると、寒々とした冬景色の中でひとときわ静まりかえっている裸木の群は、声もなく泣いているのではないかと思われたりした。

少年時代はくぬぎ林も我が家並みに遊びまわったらしい夫の、くぬぎの木に降った雨のしずくのきらめき具合等きくと、私のイメージが意外に観念的な事が判る。どうやら林は、疾走する車と外部からかきこえる位の人間には、とても門扉を開いてくれないらしい事が判った。未だ未だあの林を語れる資格が私にはない事が判ってみても、外からの魅力は判っているからまあいゝでしょとなつてしまふ。

J・コクトー氏が「アメリカ紀行」Vの

中にこんなことを記していたのを思いだす。一本には夢みるような風情がある。だからニューヨークには木がないニューヨークはコクトー氏によれば立ったまゝ眠る都会だという。腰をおろす事もなく、横にもならない豊かな文化生活のこわさは意外に気付かれない。

ある朝 徳山博之

熊本の夏は暑い。誰だか、身を灼くような暑さだと云ったが、冷房の心地よさを一度味わうと、もう耐えられないような夏である。敵しい気象風土は、激しい人を育てるといふが、この偏屈なまでの熊本の風土も、やはりもつこす代表される県民性にまで及んでいゝのだらうか。

東京に行くと、熊本の人は朴訥な感じとかで、好感を持たれる。しかし暫くすると、度量が小さいとか、融通がきかないとか、粗雑であるとかで嫌がられる。最初の印象が、いかにも都会から失なわれた自然風であるだけに、その失望は大きいという話である。

が何と云っても、熊本という風土の中に住んでいるのだから、県民性という数もひつついてこようが、みずから手地方の穀を見るために、頑迷な暑さを吹き飛ばす対話が欲しいものである。

その地方色、地方性、ローカリテイという言葉。確かに自分たちの身近かな生活、感情に根ざしたものであるが、それだけに安易に、我々だけのものといったものに固執しやすくなる。習慣を作法と感違いするような誤りを、ローカリテイだと信じこんだりしてはいないだらうか。

車だとかの現象面になると、実に明快な反応と興奮度を示す。しかも均一的な確かなパターンを描くのである。精神性はなくとも、ある方向へのエネルギーを集めていること丈はいえるだらう。

ある朝のテレビで、戦友のねむるフィリップに霊をなぐさめに行つた人の話があった。そこは、一滴の水も湧かない砂丘で、四百の日本軍に一万の米軍が攻撃をかけた。戦果は自から明らかであるが、戦うより前に大半の日本兵は渴きと熱病に倒れた。今もなお鉄かぶとや背のうが、熱帯の焼けた砂にうづまつている。水がないため、コーラで遺品を洗つて来たそうだが、その人は戦争は終わったが、つい昨日のような気がする。それを思うと無責任なことは出来ない。と云っていた。

このことを、ある大学生に云つたら、ヒューマニズムと無責任な行動とはつながらない。といった。

私も直接的に戦争は知らないが、終戦を機に、歴然と世代の断層が窺えるような思いがした。精神性の回復を唱える世代と、未知のエネルギーを内包する世代の共通のよりどころはないものだらうかと、何かその辺を掘り起してみたい気がする。(演出家)